

福島に伝わる十王像と十王思想の展開

村 越 信 子

(平成6年9月30日受理)

The Images of Ten Judges in Hell handed down to Fukushima and Development of the Thoughts on Ten Judges.

Nobuko MURAKOSHI

(Received September 30, 1994)

はじめに

『八溝山ハ本村ノ西、北ハ東白川郡ニ属シ、西ハ下野国那須郡ニ接シ、東南ハ皆常陸国久慈ナリ。山中洞穴多シ。古黄金ヲ掘リシ処ナリ。……』と記されているように福島・栃木・茨城の三県にまたがる八溝山(標高1,020m)は昔から信仰の山でもあった。

頂上近くにある日輪寺は大同二年(807)開基の寺で、鎌倉前期に観音巡礼坂東三十三ヶ所第二十一番の札所にもなっている。この八溝山の福島県側の東山麓に、真名畑という部落がある。この谷間に早くから人が住んでいたことは縄文土器が出土していることによっても知られている。これら先住民を圧しながら、大和朝廷の東北経営が進み、勿来と白河に閤が置かれたのが四世紀の終わりか、五世紀の初め頃という。久慈川付近は、古くから常陸国から福島県中を通りへ、さらに会津地方へも通ずる、重要なルートとなっていた。

真名畑の部落は、久慈川の最上流にあり、また、勿来・白河の両閤を結ぶ線にも近く、文化が早くから開くべき位置にあったといえることができる。この地の仏教伝来も筑波山の徳一上人、日光山の得道上人などの影響を受け、先駆者たちによる仏教活動もあった。とりわけ七世紀から八世紀、すなわち白鳳から天平に及ぶ期間、寺院の建立もあり、大和朝廷支配権がおおって日本武尊の伝承や都々古和氣神社信仰をも山岳仏教徒は利用し、混淆して行われていた。さらに八溝山について、平安朝の初期にできた『続日本後記』に記事が載っているが、それには、『八溝黄金神付近、砂金が採取でき、遣唐使の資を助けることができた』という。八溝山東側のソソメキ沢・モ服飾美術学科 彫塑研究室

ミリ沢・アナノ沢・ヤカンノ沢などに、今も数多く残る坑道は、その当時のものと思われる。これらのことは、真名畑の人々の生活に、大きな影響と変化を与えたと思われる。当然のように、この付近は早くから高度な文化が移入され、経済的にも裕福な土地柄であったことは明らかである。

この塙町・真名畑に、古くから伝わる木彫像群が、部落の人々によって、今も大切に保存されている。地藏菩薩坐像(36cm)一軀、十王像群(26cm)十一軀、それに小形立像(28cm)二軀がそれである。〔図版1〕地藏菩薩坐像の像底には、文治二年(1186)の墨書銘が読め、在銘藤末鎌初(初)の仏像として、きわめて貴重といわねばならない。これらの造形は、地藏十王思想によって造立されたものと思われる。この地藏十王思想は、仏教の六道輪廻の思想の六道(後述)の最下位の地獄と、道教の冥界思想により唐代後期頃に確立し、この信仰は、日本では平安時代の浄土教信仰の発達とともに盛んになった。

地獄の最も烈しい責めから救い出してくれるという地藏菩薩と、地獄の法官である十王とが結びついて、地獄救済の仏として篤く民間に浸透し、現在の地位を獲得するにいたっている。彫刻の上では、それが盛んになったのは鎌倉時代以降といわれている。

墨書銘にある文治二年は平安時代の末にあたり、地藏十王思想が必然の勢いで広まりはじめたとしても、初期の段階で、どのようにしてこの真名畑の地に地藏十王像群が存在しているのか、興味が尽きない。よって、それを本論のテーマに選び、貴重な文化財をより深く理解し保存していくための考察を進めたい。



〔図版1〕真名畑に伝わる地藏十王像群

1. 真名畑に伝わる地藏十王像について

福島県東白川郡塙町真名畑字荒屋の菊地氏宅に、現在この十四躰の木彫像が保管されている。以前、菊地氏宅の前方約100mの小丘中段に、地藏堂と十王堂が並祀されていたが、明治の頃、両堂が破損されたので、堂内に祀られていた木彫像群を、菊地氏宅で保管するようになったものである。堂跡には今でも、石畳と礎石とみられる石が点在している。

地藏菩薩坐像は、両手・膝前剥ぎ合わせで、今は失われているが、膝上に箱状にものを載せていたらしい。像高36cmで、像底に次の墨書銘がある。『十王堂 文治二年八月□□□□地藏堂□□□□』十王像は、台座まで一木彫りの座像で像高26cmの小像である。台座正面に花紋を浮彫りにし、風化がみられるが、共通する見事な彫法を伝えている。

本稿では、これらの一群の地藏菩薩坐像や十王像の材質を確認するまでにはいたらなかったが、この八溝地域を含む福島県は、木材の種類も多く、豊富に産出しているので、限定することは難しい。しばらく時を待つこととした。

地藏菩薩坐像には、やわらかな木の感触が感じられるが、それに比べると十王像の方は、どっしりと重く、丸太四つ割り（像の一角に芯材あり）を利用している。風化のため年輪がくっきりと現われ、表面が波打っている。

しかし、秦広王・初江王・宋帝王・五官王・閻魔王・變成王・太山王・平等王・都市王・五道転輪王の十王とそして脱衣婆がみごとに表わされている。その中でも、高く庶民の信仰を熱め、思想的にも大きな存在である閻魔王と、比較的表現豊かな脱衣婆とを、より理解を深めるために模刻を試み、私なりの表現を試みた。〔図版2〕〔図版3〕

この木彫像が保管されている真名畑という部落は、現在寺はない。かつてあったらしい真蔵寺と称する寺院は、明治初年の廃仏毀釈に遭い、その犠牲となって取り壊され、本寺の屋敷は数筆に分割させられ、今はその跡形もなく畑地と化している。この真蔵寺は正しくは天竺山性泉院真蔵寺と称し、真言宗の古刹だったらしい。この真蔵寺を知る手掛かりは、塙町郷土資料から『天竺山真蔵記』という小型の巻物（0.1m×3.4m）によって知ることができ、この村の過去帳のようなものにあたる。しかし、年号や内容から少なくとも七百年ほどの年月のひら

きがあり、理解しにくいところもある。だが、『天竺山真蔵記』によると、この地藏十王像群に関することがわずかではあるが記載されている。『奥州白川郡真名畑村有間地藏菩薩、並十王堂棟札（貞治四年<1365>）地藏尊四霊地の事。…』の記文が収められている。さらに『有間円満院有法院の墓』には「十王免の畑是也」とあり、これは十王堂所蔵の畑地であった。これを「有間古屋敷」といったこともある。

最初は円満院の大門上の安置し奉るとあるが、後にその境内に十王堂を新築して、仏像をその堂に安置したものと推察される。現在の荒屋の菊地氏宅付近がそれにあたる。明治初年までは、大きな土饅頭の塚があったが、今も十王堂跡とともに二カ所が保存されている。

以上が木彫群・地藏十王像に関して知るすべての手掛かりである。

2. 塙町真名畑の地域について

真名畑のある東白川郡塙町は、木彫像が制作されたところ、どのような歴史をたどっていたのであろうか。

古く、日高見国と呼ばれた東北地方は、大化の改新後道奥国（みちのおおくに）と改められ、国府は宮城県の大賀城に置かれた。そのために平城京（後平安京）と陸奥国府（多賀城）を結ぶ官道は、山道（国道4号線沿い）と海道（国道6号線沿い）があった。

山道の駅は、雄野（表郷）・松田（東）・磐瀬（須賀川）・葦屋（郡山）・安達（本宮）・湯田（安達）・岑越（福島）・伊達（桑折）などである。

海道の駅屋10駅は、養老三年（719）に設置され、弘仁元年（811）に廃止されている。延暦二十四年（805）には、伝馬も廃止され、そのかわり、常陸から久慈川沿いに長有・高野の二駅を新設して、山道の松田駅に接続している。

このことは、塙町の古代史上きわめて重大なことであった。それは平安京（京都）から常陸国府（石岡市）・海道の浜通り經由多賀城だった国道が、常陸国府・塙町經由多賀城と路線が変更になったからである。中央文化の流入路となった塙町は、当然通過だけでなく、定着した文化も多かったと推定される。さらに白川郡は、律令に定める適正規模の上限にあったうえに、久慈川線の官道昇格以来一世紀、開発の進展と文化の向上により、一つのまとまりを成す地域社会が形成されたことと、白川郡の砂金も財政上の役割も大きく、この地域の重要度



〔図版2〕閻魔王



〔図版3〕脱衣婆

が増したことは忘れてはならないことである。

この地域の豪族の中に、高麗系渡来人（帰化人）の一族の名前も見られることは、地藏十王思想が早くからこの地に移入された、一つの証しでもあると考えられる。十一世紀以来、日本の西国の商人たち頻繁に高麗と通商をしていたことが、『高麗史』に見られるからである。なお、朝鮮の地藏十王図も、多数もたらされている。また、中央との結び付きについては、奈良地方と福島地方に同一の地名が沢山点在していることも挙げられる。郡山・山田・棚倉・向山・磐城・二本松・高田などである。これらの意味するところは、大和朝時代奈良には、すでに二十五万からの人々がひしめき合っていたという。天候の具合で作物でも悪くなれば、大量の餓死者が出たのは当然のことであるし、食糧難は慢性的なものであったろう。その結果として夜盗の横行等、治安の乱れも最悪の状態となった。このような状況下で、奈良地方から住民を大量に疎開させる必要が生じたのではなかろうか。その移民の落ち着き先として選ばれたのが、未開の地、陸奥の入口にあたる福島県であったと思われる。そして住み着いた土地に、故郷の地名をつけたものであろう。そして言語、習慣を異にする渡来人も多数いたことであり、平和な天地とは限らなかったはずであるが、入植地は福島県全域に広がったようである。我々の想像以上に政治・文化の中心地であった奈良や京都と東北とは、往来が激しく密接だったといえるであろう。

3. 地藏十王思想について

これらの地藏十王像の制作されるにいたった思想的背景は、どのようなものであったのであろうか。

十王に対する信仰は、中国の唐の後期から唐末五代にかけて成立したもののようである。それは悪業を取り除き、地獄からの救済者である地藏菩薩に対する信仰と結び付いて、仏教の中で特異な展開を示しながら各地に広まった。

十王は冥府にあって亡者の罪業を裁判する十人の王である。十人の王官が死者を裁くということは、中国固有の民間信仰である道教の影響と、仏教の六道（地藏・餓鬼・阿修羅・畜生・人間・天）思想の地獄の習合である十王あるいは、十王と地藏菩薩を組にして描いた仏画は中央アジア・敦煌その他の中国・朝鮮・日本に残っている。

わが国においては、十王信仰は平安時代の浄土教の発

達とともに盛んになったが、十王図や彫像が制作されたのは鎌倉時代に入ってからである。日本で最も早く作られたと考えられるのは、福岡・誓願寺の十王図である。

画像の場合は、地藏菩薩に加え眷属を従えた各王を十幅に分けて描き、あるいは一幅の十王図のみとするのが一般的である。彫像の場合は、十牀の十王像を十王堂に配したり、地獄の最も烈しい責めから救い出してくれるという地藏菩薩と、地獄の法官である十王を一堂に配して祀られたり十王の一つ、閻魔王を中尊としてその他の九王と、司命・司録・俱生神・脱衣婆などの眷属を加えたりする。さらに、冥府の鬼卒や檀拏幢（人頭杖）、淨瑠璃鏡、業秤なども造られ、群像として閻魔堂に祀られていたようである。

これらの王の像形は、本来は一般の仏像と大差ない姿であったが、時代がすすむにつれて、いずれも中国宋代の裁判官の制服にのっとったものとなった。〔図版2〕

十王やその眷属について簡単に記す。

- | | |
|----|------------------------|
| 第一 | 秦広王…不動明王（本地仏・以下同じ）…初七日 |
| 第二 | 初江王…釈迦如来……………二七日 |
| 第三 | 宋帝王…文殊菩薩……………三七日 |
| 第四 | 五官王…普賢菩薩……………四七日 |
| 第五 | 閻魔王…地藏菩薩……………五七日 |
| 第六 | 變成王…弥勒菩薩……………六七日 |
| 第七 | 太山王…業師如来……………七七日 |
| 第八 | 平等王…觀世音菩薩……………百ケ日 |
| 第九 | 都市王…阿閼如来……………一周忌 |
| 第十 | 五道転輪王…阿弥陀如来……………三回忌 |

人が死ぬと、初七日、二七日、三七日……………一年、二年と、次々に裁判所に送られ、生存中の罪状が審判されるという。十王はそれぞれの裁判所の長官である。たとえば、五七日（35日）は、死者が冥土で五回目の審判を受ける大切な日として親族、縁者、僧侶を招いて初七日と同じように手厚く法要を行う日となっている。

この五七日の審判にあたる閻魔王は、特に地獄を支配する王で、礼服を着用し、笏をとり、はなはだ威相の風貌に表わされている。閻魔堂に単独で祀ることもある。

司 命…罪状の究明

司 録…罪状の究明を記録する役

俱生神…人が生まれてから生涯、その肩にあってその人の行動を監視し、死後閻魔王に報告する。閻魔天の変形として考えられている。

鬼 卒…十王に従うもので地獄の獄卒である。

脱衣婆…俗に葬頭河（さんずのかわ）の鬼婆をいう。

十王像とともに安置される場合が多い。

十王像の代表的な遺品としては、鎌倉・円応寺（建長三年〈1251〉）奈良・白毫寺の像（正元元年〈1259〉）が名高い。閻魔王の像には、京都・宝積寺の像、六波羅密寺の像などいずれも鎌倉時代の像である。

俱生神像は、宝積寺像や滋賀・浄信寺像、これも鎌倉時代の作である。司命・司録は、白毫寺像・宝積寺像・奈良金剛山寺像（鎌倉時代）などが知られている。

その他に、法具に近いものであるが、檀拏幢いわゆる善悪人頭杖があり、円応寺幢（南北朝時代）が名高い。杖の上の荷葉に善悪を見抜く童形と忿怒の二面を載せる脱衣婆（葬頭河婆）は、三途の川で亡者の衣類を剥ぎ取る鬼婆である。長野・牛伏寺像（応永二十九年〈1422〉）や円応寺像（永正十二年〈1515〉）などが知られている。他に、円応寺の鬼卒像、宝積寺の閻魔童子像（いずれも鎌倉時代）などがある。

これら十王信仰の典拠となった経典は二種類ある。一つは『閻魔王授記四衆逆修生七齋功德往生浄土経』略して「預修十王生七経」・「十王生七経」であり、他の一つは『地藏菩薩発心因縁十王経』略して「発心因縁十王経」・「地藏十王経」と呼ばれている。いずれも唐時代末に成立した偽経である。インドや西域から伝わったものなどを、新たに中国で経典にしたものと思われる。「預修十王生七経」も「発心因縁十王経」も、仏教と西域や中国に流行したマニ教の冥府信仰や道教の信仰、そして民俗信仰などが結合して、中国で成立したと考えられている。『預修十王生七経』の預修は、現世では延命を求め、また、死後の自らの冥福を祈って、生前にあらかじめ仏事を修することを意味する。従って、もともとの地藏菩薩信仰を背景に、故人のための追善齋へと転じている。これが六朝時代以来、父母への孝養を重視する中国社会において、遺族がなすべき祭礼として、広く民衆の間に浸透し、流布していった。これは中国のみならず、朝鮮や日本にまでも影響を及ぼしている。『発心因縁十王経』は『預修十王生七経』の十王の信仰を受け継いだことは確実である。

大きな特色は、これら十王の仏教における本地仏として、不動明王以下の諸尊を配していることである。前述のように、地藏菩薩と閻魔大王が同体であると定義するとともに、鎌倉時代以降、庶民信仰のトップを独占した不動明王から虚空蔵菩薩に及ぶ、十三仏中の初めの十仏

が登場している。この経典がわが国で人気を集めたのはやはり、地獄救済の十王信仰と、死者追善の十三仏信仰がミックスしているところにあるといえる。十三仏とは、十王の本地仏に阿閼如来、大日如来、虚空蔵菩薩を加えたものである。

4. 十王思想の展開（わが国の受け入れ方）

日本において十王信仰が定着するまでには、それなりの準備と基盤があったはずである。日本の古代の人々の死に対する観念は、仏教が伝来してから日なお浅く、人々にはまだ仏教の説く六道輪廻の思想を良く理解していなかった。

人々は固有信仰のうちに生きていた「夜見の国」といわれる重苦しく恐怖に満ちた死後の世界を、六道のうち最悪道である地獄と重ね合わせ、漠然と観念していたのである。その状況は、飛鳥・白鳳時代が過ぎて、次の天平時代を迎えても、東大寺二月堂の本尊十一面観音像の光背の裏面の下端に描かれた地獄図にあらわれている。それは簡単な線影りによる十八個の鬼形と火焰との組み合わせによるものである。さらに天平宝字七年（763）の年記があったと伝えられる当麻寺の阿弥陀浄土図、いわゆる「当麻曼陀羅」には、観音の周辺から六条の霊芝雲が流れ出し、その各々に六道の各相が描かれている。

それはいたって簡単な図で、天道と人道とは横向きの各坐像、阿修羅道は六臂の一坐像、畜生道と餓鬼とは各一獣一鬼であらわし、地獄のみは罪人を釜ゆでにする一鬼が描かれている。さらに大安寺所蔵の天平時代の作の観音像は忿怒相の珍しい像であるが、阿弥陀から独立して流行病の根源である悪鬼、すなわち、怨霊を調伏し得る霊力を持った仏であることをあらわしている。

これらの例からもわかるように、地獄の救済者を観音としながらも、いまだ六道に対する未熟な段階を示し、日本人が六道について徐々に開眼していく様子を察することができる。この図によってみても、浄土教関係の観音（阿弥陀の脇侍としての観音）も六道救済の仏としての性格を、はっきりとあらわしていることがわかる。

日本人の六道思想に対する理解を深める上で、大きな貢献を果たしたと思われるものとして「悔過（けか）」がある。阿弥陀悔過は天平時代、薬師悔過は天平後期から平安時代初期頃、諸国国分寺を中心に全国的に修されたのだが、死の恐怖に対して、仏教が初めて救済の手をさしのべた状態を示すものとして歴史的意義を持つもの

である。その功德は、怨霊のなすさまざまな災害を鎮圧することにあった。同じ頃から新しく行われるようになった、もう一つの悔過、仏名悔過がある。それは薬師や阿弥陀の宝号を称えた、薬師悔過や阿弥陀悔過をさらに徹底させ、無数ともいえる仏名を称えることによって、強力な呪術的效果を期待したものである。

この仏名会に、北側壁に一万三千仏画像に対しても、南側に地獄変御屏風を立てたことには、悔過と六道信仰との深い結び付きがあらわれている。

この薬師・仏名両悔過が隆盛を極めた時期から少し遅れて、十世紀を迎えると天台宗における浄土教の著しい発展は、六観音が六道救済の仏としてあらわれ始める。

聖観音……………地獄

千手観音……………餓鬼

十一面観音……………阿修羅

馬頭観音……………畜生

不空罽索観音…人間（真言宗では准胝観音）

如意輪観音……………天

以上のように、奈良時代以来の変化観音を中心とする六観音を六道に配し、六観音信仰を急速に盛り上げていく。

十、十一世紀になっても、悔過による国富の除災招福の祈祷は残っていたが、それよりも、家々もしくは故人の除災のための六観音信仰がしだいに盛んになってゆき、日本の伝統の深さを考えさせられる。

ところで六道の救済者としての観音について考えを進めてきたが、地蔵菩薩が六道の救済者と明確に意識されるようになるには、もっと時代が経過しなければならなかった。

法隆寺金堂と橘寺に、平安時代初期にさかのぼる地蔵らしい彫像があるが、後世の左手に宝珠、右手に錫杖を持った地蔵とはちがって、右手は与願印にあらわされている。明確に地蔵が六道の救済者と認識されるようになったのは、いつごろであろうか。（地蔵菩薩の右手が与願の印であらわされている頃は、神像とみる説もある。）

現在最古の実例としては、奥州藤原三代の中尊寺金堂の須弥壇に、それぞれ安置された六地蔵は、すべて当時京都に注文して制作されたものと思われるから、一番古い消衡壇の成立した天治元年（1124）の頃、京都ですでに六地蔵信仰が、相当流行していたことが推定できる。

この地蔵菩薩が十一世紀以降、地獄の救済にあたる姿

はどのようなものであろうか。彫像の例を見ると、定朝作と伝える六波羅蜜寺の地獄菩薩像のように、その姿こそ、地獄堕ちの恐怖におびえる人々にとって、まことに救済者として仰がれた姿となっている。

日本では地獄信仰とその彫像は、すでに奈良時代（8世紀）から行われたというが、遺例は平安前期（9世紀）からで法隆寺金堂の地蔵菩薩像があげられる。以後各時代を通して信仰を集めたので、遺品もはなはだ多い。それらは立像・坐像・半跏像で、初期の作では、左手に宝珠を捧げ、右手は与願印とするが、平安中期頃以降は左手に宝珠、右手に錫杖を持つ像容が普通となる。（後世では、この像容を延命地蔵と呼ぶ。）地蔵菩薩の教典である『大乘大集地藏十輪經』から、地蔵菩薩は、末法の無仏時代に六道、すなわち俗世にあって、釈迦から衆生を救済することを託された菩薩であったことがわかる。

しかし、極楽往生できる人は限られていて、多くの人々は地獄堕ちが必定であった。このような時思い出されたのが無仏時代に活躍されるという地蔵菩薩であった。地獄の主、閻魔王についても古くは『日本霊異記』巻下第九に、いったん地獄に堕ちた藤原広定が、閻魔王にあって蘇生する物語をおさめている。閻魔王の姿は殊（たま）すだれ）の中であって、面貌を見ることができなかったと、記しているように定かでない。これは彫像の場合も同様で、閻魔王像の古い代表的な作例としては、前述した宝積寺像・円応寺像、白毫寺像等、鎌倉時代以後の作品ばかりである。

平安時代の作では、東京国立博物館、奈良国立博物館、益田家旧蔵の各地獄草紙は、ただの罪人の地獄での責め苦の様を描くだけであって、閻魔王の造形化の跡は遺品のうえでは認めることができない。ここで、平安時代に閻魔王が存在したかが問題になってくる。というのは、閻魔王像の代わりをする密教の十二天のうち焰摩天像の存在である。焰摩天が表わされている画像には、九世紀に遡る例もあるし、彫像にも平安時代後期の作品が残っているからである。

この密教の焰摩天像は、菩薩形で右手に人の首を半月形の上に載せた、いわゆる檀拏幢（人頭杖）をもち、水牛の上に乗るという図像上の特色をもっている。ところが伝統的な仏画様式による聖衆来迎寺や神護寺の十二天屏風のそれぞれの焰摩天には、菩薩形をとりながら歯をあらわして、忿怒相に移行しようとする萌芽が見られ、興味深い。

鎌倉時代に入っところ、焰摩天の菩薩形が忿怒形に代わるのは、大陸の影響であったと思われる。密教十二天のうち、摩天が地下にはいると、地獄の王閻魔天となる。醍醐寺本・閻魔天曼荼羅は、檀拏幢を持ち、水牛に乗る菩薩形の閻魔天を中心に太山府君・五道大神・司命・司録等をその周辺に巡らした曼荼羅であるが、京都国立博物館本閻魔天曼荼羅では、中尊閻魔天が檀拏幢を持ち、水牛に乗る点は共通しながら、ひげの生えた忿怒相で身に鎧をつけた閻魔天へと変わっている。

以上のような密教の焰摩天の存在は、一方では浄土教の閻魔王を派生しつつ、その本来の形式をいまだ密教像のうえにとどめている。

さきの閻魔天曼荼羅をさらに複雑にした、十九位曼荼羅（12世紀前半頃）があるが、中国王侯の服装をつけた司命と司録の他、中尊閻魔天が髭髯を蓄えた忿怒形で身に鎧をつけ、ここにも密教の焰摩天から浄土教閻魔王へ移行する過渡期の様相を見せ、造形化実現に踏み出している。

閻魔王の出現について考察すべきもうひとつの側面として、忿怒形の閻魔王に対する信仰の内容である。恵心僧都が説いた厭離穢土とは、修生を欣求浄土に向かわせるための良き手段と考えられた。そのため、恵心僧都の説く六道には、救済の手段がまったくなく、修生は六道の苦を逃れるために、ひたすら浄土に生まれることを願わなければならない。

そこに地獄を支配する強力な閻魔王が出現するようになると、閻魔王には、人間の善悪の果報を定める大きな権力が付与される。この世で罪を犯した者は、地獄に堕ちるが、地獄入りの前に閻魔王の裁定があって、そこで罪が初めて決定される。裁定に当たっては、観音や地藏の救済もあったが、閻魔王自身の情状酌量もありえた。

ここに閻魔王の心証をよくするための、閻魔王に対する信仰が発生する。貴族仏教の枠内で生まれた恵心僧都の浄土教とは違って、その生業や環境の上から、必然的に悪を犯さなければならなかった多数の一般民衆の救済を目指した法然の浄土宗にあては、浄土図や来迎図のほかに地獄の閻魔王庁を中心にした六道絵や閻魔王像を中心とした冥官群像を祀る閻魔堂が必要になってきたのである。

新しい時代の要請は、このような浄土宗の動向に呼応して、他の宗派においても同歩調をとらしめ、大きな時代の風潮を形成するにいたった。この点から新しい時

代に、閻魔王像の造立が流行した思想的背景の一つをうかがうことができる。さらに、この新様式勃興時代に、仁王像や神将像などを得意とした奈良の七条仏所、すなわち慶派の仏師たちがあいついで閻魔王を含む十王像の制作に励んだのは当然のことといえよう。

むすび

福島に伝わる地藏十王像について、より理解を深めるために、この真名畑の地域を中心に、東北と京都・奈良（中央）との結びつきや歴史をたどってきた。

さらにわが国の仏教の受け入れ方、浄土教の発達、また、その背景となる地獄の思想、六道思想との結びつき地藏菩薩信仰、焰摩天から閻魔王への変容が問題となった。それに中国からの十王思想が加わって、そこに庶民生活に浸透していった地藏十王思想の展開があったのである。だが、この十王像群が、造様などから、中央の仏師により制作されて、この福島に持ち込まれたとは考えにくい。様式からいっても、地藏十王思想の典拠の上にこの土地で作られた地方仏と考えたい。

次のような場合が考えられよう。

- ① 福島にいる渡来人により制作された。朝鮮から直接的に信仰が移入された可能性も考えられる。
- ② 菊地氏のご先祖が、陸奥の国・平泉方面より持ち込んで、この地に定着した。
- ③ 地藏菩薩と十王像の制作は、像のバランスや材質から別々に制作され、後に一緒に祀られた可能性もある。（セットで制作されたとは限らない）ゆえに、制作年代も同時期とは限らない。
- ④ 2章より、この地域は中央文化の流入路でもあり、初期の段階で、十王像が存していても不思議ではない。真名畑に伝わる地藏菩薩一鉢、十王像・脱衣婆等十一鉢、小形立像二鉢の計十四鉢と記しながら、小形立像二鉢については触れずに結びにきてしまったので、簡単にここに述べる。

現在は、この二鉢は、地藏菩薩の脇侍のように祀られている。風化は激しいが、特徴として一鉢は袖の中で手を組み、胸前にもってきている姿であり、もう一鉢は、腰をわずかにひねっている。どちらも全体のバランスや肉付きから、どこか童子像を思わせる。普通、地藏菩薩は、単独像の他、脇侍を伴うもの、如来の脇侍であるもの、また、群像としても存するので、この小形立像が地藏菩薩の脇侍として作られ、三尊形式であったとしても

不思議ではないし、のちにこの群に何らかの理由で加わったものと考えられる。

栃木県佐野市の普門院にある、矜迦羅童子（40.3cm）制陀迦童子（44.9cm）を脇侍とする延命地藏菩薩の例を参考例として記しておきたい。制作年代は寒延四年（1751）のものである。

遺品としての代表例は、3章で列記したが、庶民信仰が盛んであったので、現在どのような形であるにしても身近にある地藏や十王像に関係するものを以下に記しておく。

東北全般には、山形県寒河江市の熊野神社に、木造伝十王坐像（二軀）がある。二軀とも平安時代後期の作で寄木造り、像高約160cmである。やはり、十王信仰の初期の段階の作といわれている。彫像ではないが、山形県東田川郡の六十里越街道の松根と大網の間の峠の名前に十王峠という地名が残っている。峠に昔、十王堂や石地藏があったことから、この名で呼ばれているそうである。江戸期には、月山から湯殿山を参詣した俳聖松尾芭蕉も通った峠である、そのほか、十王村、十王堂町、その村にある十王小学校など、この付近には十王信仰に由来する地名が多い。我々の生活の中には、関東を中心に十王塔（十軀の十王が浮き彫りにされている）、石仏（十王像や閻魔大王、脱衣婆の丸彫り）、特に単独の閻魔大王や、脱衣婆などが寺院内や道端に祀られて、道行く人に語りかけているように思える。

このような形で、各地に多く十王像が残されているのは、なんとしても地獄への恐怖から逃れたいという庶民の願いがいかに強かったかを物語っている。

そして、この真名畑の地に、今もなお、篤く保存され

ている地藏十王像群について、より理解を深めるために、今後も私なりの調査を進めたいと思っている。

謝 辞

この小論文作成にあたり、ご助言いただきました井上章教授、木内禮智教授に深く感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 塙町史 第1巻・2巻 塙町発行
- 2) やみぞ（創立百年記念誌） 塙町立真名畑小学校
- 3) 棚倉史談 第3・4・5号 棚倉史談会
- 4) 日本仏教美術史研究 中野玄三郎 思文閣出版
- 5) 仏教芸術 89号 毎日新聞社
- 6) 庶民のほとけ 頼富本宏著 NHKブックス
- 7) 仏教大事典 小学館
- 8) 世界美術辞典 新潮社
- 9) 奥州藤原氏 高橋富雄著 吉川弘文館
- 10) 仏教美術の基本 石田茂作著 東京美術
- 11) 関東彫刻の研究 久野 健著 学生社
- 12) 日本石仏辞典 庚申懇談会
- 13) 日本地名辞典 角川書店
- 14) 地藏信仰と民俗 田中久夫著 木耳社
- 15) 坂東三十三観音札所廻り講談社カルチャーブックス
- 16) 探訪・日本の古寺1 小学館
- 17) 観音信仰 速水 侑著 塙書房
- 18) 日本の宗教 村上重良著 岩波書店
- 19) 日本の美術No.313閻魔・十王 文化庁

以上